平成27年12月１日

校長会 みえ

No.41

三重県小中学校長会　広報　第41号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142　三重県教育文化会館内　TEL 059-227-7011　E-mail info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会　広報委員会　●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1　TEL 0598-29-1234

私の学校づくり

当たり前のことが機嫌よくできる学校

いなべ市立十社小学校
校長　水貝明子

先生は「学校の宝」

今年の運動会は、前日まで雨が降り続き、グラウンドコンディションは、良くなかった。そのため、昼一番の一輪車演技前には、先生方が昼食もそこそこに、トンボで運動場をならし始めてくれた。運動会終了後、その姿をご覧になっていた保護者の方から、こんな言葉をかけて頂いた。「一輪車演技のために校長先生や先生方がみんなで運動場を整備してくださっていましたね。こんな先生方のいらっしゃる学校に通うことができて幸せです。」と。特別なことではなく当たり前に動いてくれる先生方の姿をそのように評価して頂き大変恐縮した。

私は、子どもと同様、先生方も、「学校の宝」だと常々、思っている。教師の何気ない姿勢や実践が、学校への信頼を生み出すことを改めて感じさせてもらった。

笑顔が主体的な活動を創り出す

「人間は機嫌よく仕事をしている人のそばにいると、自分も機嫌よく何かをしたくなる。子どもの主体的な活動は、機嫌よく仕事をしている教師の姿から生まれてくる。教師が不機嫌であるならば、それは、学ぶ環境を破壊していることになる」以前、研修会で聞いた言葉である。極論を言えば、校長の役割は、先生方が機嫌よく笑顔で実践ができる環境を創り出すことではないかと、この頃思う。そのために、日々の授業参観の助言や子どもの成長の共感、提案文書の熟読、学級通信へのねぎらいのコメント等々、個々の先生の実践に敏感でありたいと思っている。

「凡事徹底」当たり前のことができる学校

当たり前のことが当たり前のようにできる事、正義を正義であると言い切る事が、難しい時代になってきた。だからこそ、着任以来、凡事徹底！「時を守る」「場を清める」「礼を正す」ことの心地良さや大切さを子どもたちにも先生方にも話してきた。

毎朝、スクールバスから降りてくる子どもたちは、口々に「校長先生おはようございます。」と立ち止まって挨拶し、元気に走り去る。早く遊びたい心をその一瞬だけ我慢する。しかし、その一瞬に満面の笑みをたたえてくれる子どもたち。愛おしい！

晴れやかな一日のスタート、活力をもらう毎日である。

今日的課題の克服に向けて

「人権」保護者啓発…学校の取組を通して

桑名市立修徳小学校
校長　水谷光治

今まで、色々な差別について勉強しました。詳しく勉強したのが部落差別でした。部落差別はまだまだ残っています。最初は、差別について勉強するのがつらかったけど、勉強していくと自分も関係あるのに気づきました。…（中略）…これから大人になってからも、大人になるまでも差別をしたり、差別をされる側になったり、それを見たりすることはじゅうぶんにあると思います。だから、世の中すべての差別をなくせなくても、せめて自分が関わった差別や自分の身近にある差別やいじめはなくしていきたいと思います。

六年生児童作文（一部分）より

この作文は、六年生児童の人権学習のまとめとしての作文の一部である。「自分がこれまで学んだこと」「人権学習を通して自分がどう変わっていったのか」「これからの自分がどうしていくのか」等をこの児童だけでなく、六年生全員がまとめた。

この後、この作文を持ち帰り、保護者に「人権について」「部落問題について」などを語る活動を行なった。内容は、自分が学習してきたことやこれからどうしていきたいかを保護者に話した。

保護者にどう伝えるか

往々にして、行事などの通知文以外の学校からの発信情報は、保護者になかなか通じないことが多い。人権の取組など学校や学級のたよりに載せても読んでもらえなかったり、真剣には受け止められなかったりする場合がある。また、今年度も実施予定の人権における授業参観その後の懇談会にしても、参観は多いものの、懇談会などでは参加者が少なく、なかなか人権に対する啓発が深まらないことが多かった。

保護者は基本的には、子どもの勉強してきたことに対して「肯定的」である。ほとんどが『大事なことを勉強したね』『そういうことを勉強したんやね』『差別っていけないよね』『これからもがんばってね』などの反応がほとんどである。

「学校での取組」を子どもの学習成果として子どもの声を通して聴くことで、まずは人権の取組等その内容を全員の保護者に届けることができると考える。そして、家庭での話を通して保護者の思いも知ることができる。

「『部落問題だけでなくもっと勉強せなあかん差別もあるんと違う』って、お母さんが言ってたよ」という、反応もあった。子どもの意見にきちんと話し合っていただいたという証だと受け止め、子どもには『その意見にどうやって返した？』と話したり、保護者の反応で内容によっては担任が保護者と直接話したりすることもあった。

毎年、この活動を通して修徳小の取組を保護者へ伝え、『人権啓発』の積み重ねになっていけばと願っている。「先生、大事なことやで、もっと教えたって」…こういう反応は学校にとっても励みになる。今年度は、この他の保護者啓発活動も含め、一～六年生全校でこの取組を進めている。

小学校における組織的な生徒指導

津市立高茶屋小学校
校長　伊庭正彦

本校には厳しい家庭環境で生活している児童が多く、保護者の価値観も極めて多様で、本校の学校経営、生徒指導の「難しさ」は、時代の最先端を進んでいる部分もある。このような状況の中で、担任一人が背負い込むことが多い小学校において、事案が発生すれば直ちに組織として情報共有し対応策を検討するとともに、即時対応する組織的な生徒指導を本校では行っている。

本校は二十三学級中、三十歳以下の担任が十三人いる。それに対して専科は全員五十歳代で、広い視野で全体を見る経験豊かなベテラン教員を教務、生指、人権に配置している。この三名をトリプル生指担当として生徒指導体制の要としている。極端に言えば、力のあるベテランを専科に配置し、その他全員が学級担任となる体制になる。今年度は独自学級編成の必要から音楽専科をあきらめ、原則として担任が音楽を担当している。

本校の体制の特色は生徒指導委員会にある。校長、教頭、生指、教務、人権、当該学級担任及び学年担任団（事案により国際化対応が加わる）十人前後が、生徒指導事案の発生時、保護者の訴えがあった時など校長室に集まる。この会議では情報共有、対応方針や指導方法の検討、進捗状況確認、指導結果や保護者対応結果の報告等を組織として共有し、意思決定している。事案一件につき、問題認知時、結果報告時の最低二回集まる。複雑な事案や解決が難しい事案では、五、六回集まる場合もある。本校では毎日のように事案が複数件発生するので、校長室に

は毎日何回も集まることになる。

次に、本校では難しい生徒指導や保護者対応は複数教員で対応する。状況の聴き取り、児童への指導、家庭訪問等、担任にトリプル生指担当がついて複数で行っている。複数対応は、経験の浅い担任の安心感、更なるトラブルの防止、先輩教員のスキル継承（ＯＪＴ）等のメリットが大きい。さらに、学校が組織対応していることを示すことになり、安心感、信頼感を保護者に与えることができる。

このような体制を確立するためには、迅速な報告・連絡・相談（いわゆる報連相）は、生命線である。困った担任が管理職に相談した時、「どうしてこんなことができないのだ」と厳しく叱責されたり、突き放されたりするなら、担任は相談しなくなり、報連相が機能しなくなる。困り感を持つ教員が相談してよかった、助かったという実感を持てなければ、報連相が組織に定着する風土は形成されない。

さらに本校では、月に数回、不定期で、「わくわくセミナー」というワンテーマ、一時間程度のミニ研修会を行っている。「家庭訪問」「給食指導」「理科室の管理」「体験しよう WISC-IV」のようにベテラン、中堅教員が得意分野の講師を務め、若手中心に自由意思で参加し、学びあいを行っている。

本校では、初めて教壇に立つ教員も学級担任を持っている。もちろん、最初から学級担任がうまくいくとは限らない。大事なことは、個を支える体制が組織として確立できているかどうかである。報連相ができる風土、迅速な組織対応、複数による指導、若手へのＯＪＴ等が組織的な生徒指導体制の柱となっている。教員の年齢構成、若手へのスキルの継承が今日的課題となる中で、高茶屋方式の生徒指導体制はひとつの方向を示しているのではないかと考えている。

小規模校の地域連携の取組

伊勢市立沼木中学校
校長　岡　俊　晴

本校は、伊勢市の南西部に位置し、度会郡度会町、南伊勢町と接している。宮川右岸の田園地帯と横輪川流域の農山村部に集落があり旧来の五地区の中に四つの新興住宅地が混在している。全校生徒は三八名（一年生九名、二年生十九名、三年生十名）の小規模校である。平成二八年度末に隣接の宮川中学校と統合予定となっている。

生徒は純朴で、何事にも真面目に取り組んでいる。学校に対する家庭や地域の関心は高く、大変協力的である。農山村地帯のため三世帯同居も珍しくなく、生徒は家庭や地域で大切に育てられている。

しかし、九年間同じメンバーで生活していることから、人間関係で悩む生徒もいる。また、自らの意見を相手に伝えたり、他との関わりの中で自ら行動したりすることが苦手な生徒も多い。このことから、計画的に発表する場、体験活動の機会やできるだけ多くの人と出会う場を作って支援している。

教職員は、全校生徒一人一人の顔や名前、家族構成まで把握しており、学習面はもちろん、生活面においても大変きめ細やかな指導を行っている。家庭訪問を重視し、気になる点はじっくり保護者と話し込むことにより、連携して子どもたちを温かく見守ろうと努めている。

ＰＴＡをはじめ、地域の方々はよく「オール沼木」ということばを口にする。これは、沼木の子どもは、学校だけでなく地域の者みんなで見守り、育てようという思いの表れである。今年度も以下のような取組を「オール沼木」で支えていただいている。

〈地域清掃〉

学校環境デーの取組の一環として、毎五月に、校区にある地域活動組織と共催で地域清掃を行い、本年度で十回目となった。地域の方々には、生徒と一緒にごみを拾ってもらったり、軽トラックによるごみの運搬などを協力してもらったりしている。

生徒たちは、地域清掃を通して、地域に支えられていることを感じ、感謝の気持ちが持てたと思われる。また、自分たちで環境を整えるとともに、環境の大切さについても考える機会となっている。

〈千羽鶴折り〉

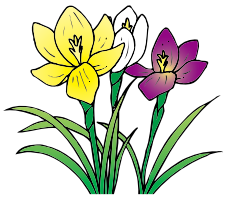
伊勢市では、市内各中学校の代表が広島平和記念式典に参加している。その時に各校で献納する千羽鶴を全校生徒で折っているが、本校では、生徒数が減少しており、また、鶴の折り方をきちんと知らない生徒もいるので、昨年度から保護者や地域の方々に学校に来ていただき、折り方指導をしてもらっている。生徒は、保護者や地域の方々と一緒に鶴を折りながら、学校生活や地域の事について話したり、平和について考えることができた。

〈文化教室〉

文化祭の半日を使って、地域の方々を講師に招き、文化教室を開催し七回目を迎えた。本年度は、ピザ教室・伊勢型紙教室・茶道教室・ヒップホップダンス教室の四講座を開講した。

生徒たちは、各自で講座を選び、それぞれ体験学習をし、体験終了後、学習の成果を発表し合った。この学習を通して、新しいことに出会う楽しさやみんなで協力する大切さを感じることができた。

統合まであと一年余りとなったが、来年度もこのような取組を続けることにより、地域の方々との繋がりをより深めていきたいと思っている。



全連小山口大会報告

志 未来創造 和をつなぐ

紀北町立相賀小学校
校長 小西正弘

十月二十二・二十三日、全国からおよそ二千六百名の会員が集まり、第六十七回全連小大会が「西の京」と呼ばれる山口の地で開催された。三重大会から設定された大会主題「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」も三年目となり、これまでの研究の成果と課題に立脚し、本年度はさらに深化と発展をさせる大会となった。

開会式の後、文部科学省大臣官房審議官伯井美徳氏からの講話では、「高大接続改革の動向」「学習指導要領改訂の方向性」「道徳の教科化」「全国学力・学習状況調査からの示唆」等、七点にわたっての説明が行われた。

学習指導要領改訂の視点としては、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」「育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し」「アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善」が示された。

また、これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上や、チームとしての学校のあり方と今後の改善方策について等、校長がリーダーシップを発揮する方向性を示す内容でもあった。

続いて、大会主題及び、副主題である「志を高く持ち　未来へ向かって　共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」についての趣旨説明が行われた。子ども一人一人に志を育むこと、互いに切磋琢磨しながら自ら学び考え、夢や希望を自らの力で引き寄せる喜びを味わうこと、他の人々や社会・自然と関わる中で共に生きることの大切さを学ぶこと等の重要性が強調された。

大会二日目の全体会では、分科会の研究協議のまとめの報告、大会宣言、シンポジウムが行われた。

各研究領域の研究協議のまとめ、小学校教育推進に全力を傾注し国民の信託に応える大会宣言、「志　未来創造　和をつなぐ」をテーマに行われたシンポジウムにおける三名のシンポジストの熱い語りに、校長の役割・指導性について深く考えさせられる大会であった。

全連小山口大会第13分科会（連携・接続）に参加して

名張市立薦原小学校
校長 谷戸実

一、はじめに

「スカイブルーのスタッフジャンパー、いいですね。」三重で全連小が開催された時、三人づれの方が伊勢の海にちなんだジャンパー姿の私に声をかけてきました。話を伺うと二年後の山口大会の準備で視察を兼ねて参加しているとのこと。別れ際には、是非山口大会にお越しをとの言葉で去られました。

その時のことを懐かしく思い出しながら大会に参加しました。山口の先生方は、萩の夏みかんにちなんだ鮮やかなオレンジ色のジャンパーで私たちを迎えてくれました。

二、研究発表

三重大会、埼玉大会の成果と課題を絶えず意識しながら分科会が進められていきました。机上には「各レポートの概要や協議の論点」が用意され、協議がしやすい配慮がされていました。

北海道のレポートは「家庭・地域と連携し、充実した教育活動を展開できる学校づくり」の視点からでした。地域参画型学校として地域としっかりとした協力体制を取り、子どもたちに地域の一員としての郷土愛を育む実践でした。校長の地域とのコーディネーターとしての役目の重要性が確認されました。

山口県は「学びの連続性を重視した取組の推進」の視点のレポートでした。十二年間の接続を意識し、小中では確かな学力の育成、保幼小ではスタートカリキュラムの実効性を高めることをめざした校長会としての実践でした。校長会として取り組んできたこととともに、お互いの異校種の思いや内容の違いを明らかにし、改善をしていった取組が素晴らしいと感じました。互いの課題や思いの共有が大切であることが確認されました。また、校長の役割を七つの項目に集約して提示されました。

三、グループ協議

レポートに沿い、様々な取組や悩みを交流でき有意義な時となりました。特に異校種連携で、教職員がお互いに顔見知りになることが大切で、そのことが教職員の当事者意識の向上につながるものだと感じました。校長の果たすべき役割や指導性を考える充実した会であったとともに、三重大会からの継続・発展を実感した大会でした。

全日中福岡大会報告

第六十六回全日本中学校長会研究協議会　福岡大会

熊野市立有馬中学校
校長　根引芳彦

秋空のもと第六十六回全日本中学校長会研究協議会が福岡サンパレス・福岡国際会議場にて開催された。「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を全体協議題として全国より約二千二百人の参加者を得て全体会が開かれた。

開会式では、伊藤大会会長より「これからは実社会との関わりをさらに重視し、臨機応変に行動していく力など社会を生き抜く力を育成することが必要である」と挨拶があった。

来賓を代表して、福岡県知事より祝辞をいただいた。続けて、全体協議会では、福井研究部長より「学校の教育力の向上、確かな学力の定着と伸長」、福島県飯舘村立飯舘中学校和田校長より「感謝と感動、そして前進。災害を乗り越え、たくましく生きる生徒の育成」の二本の提案があった。

開会行事の後、文部科学省大臣官房審議官伯井美徳氏より説明が行われた。高大接続改革の動向として大学入学者選抜・大学教育・高校教育の一体改革、道徳の教科化、学習指導要領改訂の方向性、全国学力・学習状況調査からの示唆、教育制度の柔軟性などについて、詳細な説明資料をもとに今後の国及び文部科学省の教育に対する考えを聞くことが出来た。

私にとっては時代の展望を見据えた話で興味深く聞かせていただいた。

記念講演は「ひとりはみんなの為に　みんなはひとりの為に」と題して、NPO法人ロシナンテスの川原尚行氏よりスーダンの生活改善・医療・教育活動や東北の活動を「医」全般から見た取り組みについて熱く語っていただいた。

全体会・分科会からの提案は全国の状況の一端を見ることができ、不易と流行の両方の内容の課題について知識を得る有意義な研修となった。

福岡県校長会・北九州市校長会・福岡市校長会及び関係者の大きな挨拶やあたたかいもてなしの心に迎えられ、気持ちよく二日間の研修を終えることが出来た。

全日中福岡大会第三分科会に参加して

菰野町立菰野中学校
校長　山田健一

第三分科会は『心に響き、心を耕す道徳教育の充実』という研究題で討議が進められた。

最初に石川県宝達志水町立宝達中学校の北橋校長から「より良い人間関係の構築と家庭・地域との交流を通して」という副題で、次いで静岡県牧之原市菊川市学校組合立牧之原中学校の山﨑校長から「道徳教育推進のための体制づくりと道徳の時間の充実」という副題で報告がされた。

おおむね両者に共通していた主な内容は、①道徳教育推進教員を育成することが大事であり、そのための手立てを講じる必要があること。②小中が相互理解を図り、九年間を見通した指導を確立するために、連携することが必要であること。③道徳教育推進のために研修の様々な方策を構築して充実を図ること。④体験学習を道徳教育に位置づけ体感させることが生徒の実践力を高めること。⑤校長がリーダーシップを発揮するためにも、単位校長会で共通理解や協議を深めること。⑥道徳教育を充実させるために、地域の人材や保護者の協力を得て活用することが有効であること。等が報告された。

特色と言える点は、北橋校長から提示された『別葉』と呼ばれるもので、全教科・領域を道徳全体計画に関連させて明示し、学校の全ての教育活動を通じて道徳教育を推進しようとするものであった。

山﨑校長の報告は、中規模三校、小規模二校からなる榛原地区は、五校共通で教員の各委員会を組織し、各校長が指導・助言してさらに、運営する中で、教員の指導力を向上させるべく、育成を図っている実践であった。

助言者からは、共通の物を組織的に作ることは素晴らしく、問題解決的な学習や体験的な学習を同じ視点で各校の特色を生かして取り組むのは、心を育てるために大事であると再確認された。また、道徳の教科化に伴い、評価の方向性が近々示されるので、今後、検討していきたいと示唆された。

今大会は、学ぶ点が非常に多くあり、気づかせてもらう機会に恵まれたことに感謝したい。

特別寄稿

つながり・学びあい・高めよう　みえの家庭力

三重県ＰＴＡ連合会
会長　原田　浩伸

時代の変化とともに、日々生じて来る様々な課題などに対処していただいている先生方、本当にありがとうございます。保護者は学校との協力体制を大切にしてきましたが、会員の減少などによりＰＴＡ活動にも変化が出てきているところが多々あります。

三重県には十九郡市のＰＴＡ連合会（あるいは連絡協議会）があり、三重県ＰＴＡ連合会を組織しています。これは上下関係の組織ではありません。主体はあくまで単位ＰＴＡです。三重県ＰＴＡは、各単位ＰＴＡ、郡市ＰＴＡがより良い活動を行うためには、情報交換などの支援が大きい責務と考えています。

ＰＴＡ活動を、自分たちの主体的な活動に変えていく可能性のあるものとして、今年、三重県ＰＴＡ連合会として力を入れていることのひとつが、「ファミリープログラムの普及」です。これは、平成二十六年の八月に長崎県で開催された日本ＰＴＡ全国研究大会長崎大会の分科会で採用されていた研修会の進め方です。それまでは、研修会というと、講師を招聘してその方の講演を聴く、あるいは何人かのパネラーが壇上で討論をするのを聴くもの、と思っていた三重県からの参加者には、衝撃を伴った体験となりました。今までの受け身で参加する研修会ではなく、参加者が主体となって自分の意見・感想や考えを小グループの中で発言できるからです。「自分だけではなく、ほかの人も同じようなことを感じていたのか。」同じグループになった人と共感したり、悩みを打ち明けているうちに進むべき方向が見えてきたり、あるいは、お互いに親密感を感じたりして帰宅できました。その研修会では、一人一人が持っている課題に対して、はっきりとした結論が必ず出るというものではありません。しかし、終わった後のみなさんの顔には満足感が浮かんでいます。

ＰＴＡ会長をさせていただいて、保護者の方のお話を伺っていると、子育てに関して多くの悩みを抱え込んでいる方がみえます。自分の経験や研修で聞いたことをお話させていただくと、表情が柔らかくなり、別の機会でお会いした際、大変感謝されたことがありました。このような経験を多くの方と共有できればと考えています。この稿の表題は今年度の三重県ＰＴＡ連合会のスローガンですが、話し合うことを通じて、ＰＴＡ活動の中で非常に大切な「連帯感」も生まれると考えています。すべての研修会、会議がこの手法で可能とは言えませんが、保護者が初めて顔を合わせる入学説明会やＰＴＡ総会、学級懇談会などで活用していただく場を設定していただければ有り難く存じます。

保護者は保護者の立場と役割を自覚しつつ、お互いに良い関係を作りながら、子どもたちのために何ができるか、ＰＴＡ活動の活性化のために何ができるかを追求してまいりますので、今後とも変わらぬご理解ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、三重県小中学校長会のますますのご発展とご活躍をご祈念申し上げます。

ちょっといい話

元気をいただきました

志摩市立甲賀小学校
校長　倉谷　良正

地域の敬老会に二年生と六年生が参加した時のことです。

二年生は、歌と合奏、踊りを披露し大きな拍手をいただきました。

続いて登場した六年生は鼓笛演奏でした。鼓笛隊は春の運動会で四・五年生とともに編成・演奏していますが、今回は六年生だけです。ドラムマーチを挟んで演奏した曲は三曲ほどで、最初と最後に校歌を演奏しました。

会場の隅で、私がシャッターを切っているとこんな声が聞こえてきました。

「よかった。校歌が聴けて感動した。」「わしらの校歌が聴けるとうれしい。」「子どもらに元気をもらった。」「勇気づけられる。」・・・。

数日後、ゲストティーチャーを数人招いての学習会が開かれました。その中に、敬老会に参加をされたＫさんがいました。授業の始まりを校長室で待っていただいている際、校歌が書かれた欄間額をご覧になり、次のように言われました。

「校長先生、ここの校歌ええやろ。曲（メロディ）もええけど、歌詞がまたええ。全部ええけど、特に二番の『阿児の松原　名も高く・・・』のとこが好きや。」

改めて、歌詞を眺めてみると、確かに言われた通り、一番から三番まで、美しい風景とめざす子どもの姿が、色彩豊かに、そして躍動感溢れる表現で綴られています。

「校歌は、みんなが学校で過ごしたことを思い出させてくれる。学校は、地域の中心やったから。」とＫさんは続けられました。

今から五十年ほど前、本校は全国健康優良校として度々表彰され、吹き抜けのある立派な新築校舎は全国から視察にみえた方を驚かせたと、当時この学校の教師であった私の父からよく聞かされたものでした。

そんな本校も老朽化と防災の関係から近隣の四校と統合し、二年後には、新校舎となります。

「今日は、どんな子どもらやろか？楽しみや。」

教室へ向かうＫさんたちから私も元気をいただきました。

回想の効用

四日市市立山手中学校
校長　加藤公章

四月当初に、教職員人事異動を見た同級生から「お前はまた校歌を歌えるようになり幸せやな」と電話があり、母校に赴任した実感がわきました。数カ月が過ぎ少し落ち着いたため、校長室の古い戸袋の様々なものを整頓し始めた時、奥から古ぼけた茶封筒が出てきました。その中には、昭和四十年から約十年間の、セピア色に染まり年度毎に綴じられた学級写真が入っていました。教師保管用のもので、トレーシングペーパーをかぶせてあり、人型とともに生徒名がペンで記入してありました。毎年保管されている卒業アルバムとは一味違う趣を感じました。それらの中から私が中学一年生から三年間のものが見つかり、思わず整頓する手を止めて、三百六十名いる同級生だけでなく、先輩や後輩の知人の顔を次々と探しながら一人微笑みました。

また、他の封筒には、木造から鉄筋校舎に建て替える工事の記録写真やプレハブ校舎で学習する生徒の様子も残っていて、すべてが懐かしく、時間を忘れて中学生時代に想いを馳せました。部活動、体育祭、合唱コンクール、私が教師になってから杯を重ねていた今は亡き担任のことなど。

現在も当時のままの正門や鯉の泳ぐ池と築山があります。当時、正門や築山の建設のために、地域の有志や企業の寄付により完成したこともわかりました。

「過去を追憶したり、回想したりする気持ちが自尊心を高め、将来に対する肯定的な態度を促進する」ことや、「過去を追憶することが、心理的に困難な事態を乗り越えるのに役立つ」ことが、英国のサウサンプトン大学の研究者の実験により判明しています。

まさに、懐かしい写真を手にしている私にそのまま当てはまるのではないでしょうか。

本校において職務を全うするに当たり、とてもタイミングのよい励ましになりました。

来年は、平成八年から再開している四年に一度の学年同窓会です。どのような冷やかしを受けることになるか、期待しながら幹事会にも出席したいと考えています。

第52回三重県小学校長教育研究大会
平成27年7月30日（木）

記念講演（林家菊丸様）

開会行事

会場の様子

分科会グループ討議

第52回三重県中学校長研究大会
平成27年8月20日（木）

分科会

開会行事

記念講演（澤井岳彦様）

地区校長会だより

亀山市小学校長会

人口約五万人の亀山市には十一の小学校があり、月一回定例で三中学校長と一緒に十四人で小中学校長会を開催し、続いて小中で分かれ、小学校長会を行っています。

小中学校長会では、各校の教育活動の成果や課題等の情報交換を密にし、連携を大切にしています。また、「学校経営」「人事・予算」「研修」の三つのワーキンググループを組織し、授業を軸とした学校経営の推進と充実を目指し、学校長としての指導性を磨くことを目的に研修・研究に励んでいます。その成果を月定例の小中校長会で報告・交流し、さらに議論を深めています。視察研修も毎年実施しており、今年は大阪の枚岡合金工具の３Ｓ講習会に参加しました。

亀山市の小学校は、大きな団地のある全校児童七百四十名以上の大規模校から三十数名の山間部の複式校まであり、それぞれの特色を生かした教育を推進していますが、共通の課題や一緒にしたほうが充実するものは、一致団結して実施しています。たとえば、修学旅行の旅行業者の契約をプロポーザルで一括契約し、内容の充実、予算の削減及び事務の効率化を図っています。また、小規模校や同一中学校区の児童の定期的な交流や外部講師の情報交流、授業研究・校内研修へのゲスト参加や現職教育への講師派遣など、情報を共有し助け合うことで市の教育全体の向上を目指しています。

亀山市では、平成十八年に「希望に輝く心ゆたかな亀山の子どもたち」をめざす学校像・子ども像と定め、学校教育ビジョンを策定し十年間の教育を展開してきました。今、その総括と次期ビジョンの策定時期を迎え、益々校長会の団結と充実が問われています。

松阪市中学校長会

松阪市は、平成十七年に旧松阪市・飯南町・飯高町・嬉野町・三雲町を含めて、人口約十七万人の市となりました。市内には、三十六小学校と十二中学校が伊勢湾から奈良県境までの地域性豊かな場所にあり、それぞれが地域の学校として特色ある学校づくりに努めています。

今年は、市制施行十周年の節目にあたり、確かな学力の定着と向上を願って、多くの功績を遺した郷土の偉人、本居宣長の「教え」をもとに、授業を中心とした学校生活や家庭生活の中に子どもたちが「チャレンジしていく風土」を学校・家庭とともに創り上げていこうと全小中学校で取組を進めています。そして保幼小中連携教育を推進する中で「学力向上推進サポート事業」を受け、毎年二つの中学校区で授業公開をしています。また、鎌田中学校区をはじめとしてコミュニティ・スクールの推進にも力を入れています。さらに二十三年度にＩＣＴ機器の活用実証校として総務省・文部科学省の委託を受けた三雲中学校をパイロット校に、二十六年度から飯高東中学校・殿町中学校にも一人一台のタブレットＰＣが配備され、教育の情報化が進められています。

松阪市中学校長会は、十二人で構成され、毎月一回を定例に中学校長会議を開催しています。その中で教育委員会の所管事項を受け、協議や研究そして情報交換を行っています。これからも松阪市教育ビジョンのもと「夢を育み未来を切り拓く松阪の人づくり」を基本理念に、十二人の校長が『チーム松阪』として連携・協力し、新たな学びの創造に挑戦していきます。

編集後記

三重県小中学校長会広報「みえ」の第41号を発行するにあたり、執筆を依頼させていただいた先生方には、公務ご多忙の中、すばらしい原稿を執筆していただき、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

年度を通じて最も長い二学期は、子どもたちの成長の姿が如実に表れる期間です。文化発表会や学校によっては研究発表会等、大きな行事を通してその成果を存分に発揮していただけたのではないでしょうか。また、現場では、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックを踏まえての学力の向上に向けての取組にご尽力されていることと存じます。

さて、今号では、「今日的な課題の克服に向けて」と題して、いくつかの郡市から代表して執筆いただきました。また、全連小山口大会や全日中福岡大会に参加された方からの報告についても詳しく掲載いたしました。

この会報が、学校の課題に真摯に向き合い、努力を続けておられる校長先生方の力になれば幸いです。今後とも、ご支援ご協力をよろしくお願いします。

●原稿募集

会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせ下さい。

●「校長会みえ」について、ご意見・ご要望があればお聞かせ下さい。

三重県小中学校長会
広報委員会